

被爆76周年原水爆禁止世界大会・長崎大会 閉会行事

長崎に原爆を投下されて76年。8月9日の原爆投下の日を迎えたこの日、長崎県立体育館で原水爆禁止世界大会の閉会行事が行われました。

閉会行事は、道平哲也さん・長崎県平和運動センター青年女性協議会事務局長のあいさつの後、大会共同実行委員長の川野浩一さんから閉会のあいさつがありました。核兵器禁止条約が発効し、唯一の戦争被爆国である日本が世界の核軍縮をリードしなければならないにもかかわらず、いまだ核兵器禁止条約を批准していないことを批判しました。平和憲法を持つ日本が平和をリードしないことは、なんのための平和憲法か、と訴えました。また原爆被害者である被爆体験者を認めないことの理不尽さを指摘しました。それらを解決するためには、流れを変えなければならず、闘う以外にないと訴えました。

次に、長崎大会・分科会のまとめが報告されました。第1分科会「核兵器禁止条約発効との効果と今後の課題」、第2分科会「核燃料サイクル政策の破綻、なぜ日本は決断しないのか」、第3分科会「被爆二世とは何か、その課題と自身の役割、次世代に繋ぐ」、第4分科会「見て、聞いて、学ぼうナガサキ」の各分科会の運営委員からは、分科会の講演・報告内容とともに感想が述べられました。

全体総括として、大会事務局長の北村智之さんから報告がなされ、コロナ禍にあっても、人が集う空気感を感じてもらうために努力をしてきたが、大会直前に参加の見直しをお願いすることになった地域があったことは残念とする一方、大会準備や結集していただいた方々への感謝を示しました。全体を通し、大会での分科会、国際シンポジウムなど有意義にできたことが報告されました。そのうえで「核と人類は共存できない」ことをあらためて確認し、一人一人の命の尊厳に寄り添い、核も戦争もない21世紀を作りましょう、と訴えました。

集会は、長崎アピールを採択し、山下一秀・長崎大会実行委員からの閉会あいさつで終了しました。

その後、爆心地公園に向けて平和行進を行い、11時2分に黙とうして、被爆76周年原水爆禁止世界大会の幕は閉じました。